

---

# 青いカラフル

菅井翔太朗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青いカラフル

### 【Zコード】

N1122H

### 【作者名】

菅井翔太朗

### 【あらすじ】

「お前がいると落ち着くんだよ。何もしなくていいから、一気にいいよ。いいだろ?」「…うん。」「

～ヨキとの戻る～

「ヨキ、『J飯…』

ドアの向こうからの戻るの声がある。もつもんな時間か。

「ちよっと待つて。今作るから」と声をかけるとのそと自室に引かれていく足音が聞こえた。足取りから随分空腹なのがうかがえる。

「わてと…」

切りのいいことじりまで仕事を片づけてしまいたかったが、これ以上放つておくと冷蔵庫を荒らされかねないので仕方なく夕飯の準備に取りかかることにした。

部屋と出るとすぐこの戻るの部屋のドアが開いた。

「Jねから作るから」

「…」

の戻るはそのまま動かなくなつた。そんなに腹減つてゐるのか…

の戻るは普段あまりしゃべらない。声の出しが忘れてしまつたかの様にいつも無表情のような、ほほえんでいるような、あるいはぶかぶかつかないような顔でじつとしつづる。あるいは絵を描いてゐる。あるいは俺を見つめている。

ヤツの表情の微妙な変化に始めは気付くJが出来ず戻るJともあつたが、最近ではヤツの行動からおおよその見当をつけつつになつた。

やつ言えば、あれからもう3年になるんだな…

「チャーハンを作った。早く食べたいだろ?」

「…うん。」

「素直でよろしい」

のぼるは食うのが早い。俺が半分も食べ終えない「うしごは平ら」が、

「…おかわり。」と皿を突き出す。

俺が食べ終えるまでに3杯食ったのぼるは「…いじめうそつき。」  
「めめうそつき。」とつぶやいて皿を持って流しに向かう。

ここまで来るのに半年、皿を割らずに洗えるようになるとまだもう半年かかった。

ふとそんな事を思い出しながら食後の 一服を…

「…」

のぼるがこっちを振り返る。いつもの表情のまま。

「わかったよ。ベランダで吸うよ…」

のぼるはタバコのにおいが嫌いだ。こういう事に気がつくのに2年  
かかった。

「今日も、おいしかった…」

洗い物を終えてのぼるがベランダに出てきた。

どんなに適当に作つても、どんなに丹誠こめて作つても、のぼる  
は同じ調子で同じ言葉をかけてくる。

でも、同じように見えて毎日少しづつ違う。こういう事を俺は知つ  
ている。今日のは「中の上」といった所かな。ちなみに「中の中」  
以下の評価だった場合は次の日に「じきやうを作ると決めていた。」  
これは俺の中で勝手に決めたルール。

「仕事は…終わったのか。」

のぼるはヤツになれない人には独り言にしか聞こえないような  
声でつぶやく。

しかし、のぼるは基本的に独り言を言わない。のぼるが声を出す  
のは他人に意志を伝えたいときのみだ。

「いや、まだ少し残つてゐる。今日中にはなんとかしたいんだけどなあ……」

「えうか……」

のぼるがあからさまに残念そつだ。

その訳は……ご想像にお任せしよう。

「まあ、あと2・3時間つてことだ。お前はそれまでに風呂を沸かして酒を買つてくること。わかったかな？」

「……わかった。」

のそのそと風呂場へ向かうのぼるの足音が、手持ち弾んで聞こえるのは、氣のせいではないだろう。

「素直でよろしく」

## 第一話

（美術館に行こう）

目覚まし時計が鳴る一瞬前にのぼるはムクつと起きあがつた。

次の瞬間目覚まし時計が鳴つて、その次の瞬間にはのぼるの手によつて止められていた。

「…朝だ。」

「うん…」

「…起きよ、うん。」

「うん…」

俺は朝が弱い。

普段から夜型の生活をしている性もあるが、今日はそれだけが理由ではない。

その辺は…（想像にお任せしよ）。

「…約束。」

「わかつてゐるよ…」

目をこすりこすり起きあがるとのぼるはすくに浴室に戻つて着替え始めていた。

脱ぎ散らかった衣類を拾いつつ自分も着替える。

今日はのぼると美術館に行く約束をしていたのだ。

芸大時代の後輩の作品が展示されるとかなんとかでのぼるは随分テンションを上げていたが、他のヤツの事ではしゃぐのぼるに若干のいらだちを感じた自分が惨めだったのあまり思い出したくない記憶だ。

のぼるは芸大時代に出来た数少ない友人と未だによく連絡を取り合つてゐるらしい。そう言えばそれ以外に友人らしい友人を紹介し

て貰つたことがないな。

「…はやく。」

のぼるが俺の部屋をのぞき込んで言つ。ヤツにしては積極的なアプローチだ。

「わかつてゐつて。まだ10時だろ？」

「10時25分。」

細かい。

井の頭公園駅は休日といふこともあつて随分と人出があった。

「…はやく。」

切符の券売機の前でのぼるが振り返つた。

「わかつてゐよ。」

のぼるは切符が買えない。といふか機械にめっぽう弱い。現代社会に生きる若者としてあるまじき機械音痴なのぼるは電車の切符はおろかジュースの自販機にもううたえるほどだ。

「…はやく。」

「せかすなつて…」

そう言えば切符つてどうやつて買つんだっけ？

スイカのしかもオートチャージに慣らされた自分にとつて、券売機で切符を買うのは実に久しぶりの行為なのであつた。

「…お前もスイカ買つたら？」

「…ユキ、まだ6月だ。」

「…」

「…」

六本木駅の近くにある「なんとか近代美術館」には休日といふこともあつて随分と人出があつた。

「…はやく。」

「そう焦るなつて。絵は逃げないよ

「…はぐさんの絵、はやく観たい。」

ヤツにしては積極的なアプローチだ。

なんだかイライラしてきたぞ…いんな。このパターン。

普段は俺がじれったくなるほどゆっくりとしか歩かないのぼるが今日は一般人並の早さで進んでいく。あんなに早く動くアイツをベッドの上以外で觀ることになるとは。

小さな絵だった。

葉書2枚分ほどの大きさの黒い紙が壁にかけてある。

黒い紙に見えたそれには膝を抱えてうつむく女性が描いてあった。のぼるはその前にいた。随分と長い間。

会場にはその絵の他にも大きくて迫力のある絵や彫刻が整然と並べられていたが、のぼるはその小さな絵の前にただ立ちつくしていた。

「…さびしい絵だ。」

「そうだな」

素直にそう思つた。のぼるがどうこうした意味合いで「さびしい」という表現を使つたのかはわからない。でも、「さびしい」絵だった。

膝を抱えてうつむきながら、小さな紙の上に置き去つたされた女性。

「…行かないと」

「どうく？」

「…はぐさんに会いに行く。」

ヤツにしては積極的なアプローチだ。

聞くところに寄るとその「はぐさん」は長野の山奥でひたすら絵を描いているらしい。そんな生活で生きているのだからうらやましいと思わなくもないが、俺にはやっぱり都会暮らしが似合つていると思つ。

それはさておき、恐らくのぼるはこの絵を見て「はぐさん」の心

の叫びを感じ取つたんだろう。

「気持ちはわかるけど、お前金はどりするんだよ？」

「…」

ちょっと意地悪をしてしまつた。

俺だつたら交通費と宿泊費ぐらいは余裕で出してやれるにもかかわらず、アイツの性質上アイツはこうゆう理由で俺を頼れない。変なところで遠慮する悪い癖があるので。治せつて言つてゐるのに。しばらくのぼるは黙つて考え込んでいた。俺がそろそろ「金の心配はするな」とかなんとか格好いいこと言つてやつつか、と思つて「マーマして」と、

「のぼる…」

と恐らぐのぼるのつぶやきを聞き慣れている俺にしか聞き取れなかつたであろう小さな声のぼるの名を呼んだ。

その瞬間、のぼるが今まで俺の前では見せたことのない様な俊敏な動作で振り返つた。あんなに早い動き、ベッドの上でも見たことないぞ…

そこには髪の毛のお化けみたいな、夢の島の仙人が遊びに来たみたいな、そんな変な、といふか奇怪な、といふか「人か?」と思わず疑つてしまふような風貌の何かがいた。

「…はくさん。」

いつもと変わらないトーンに聞こえるのぼるの声だったが、俺はその声に「激しい驚き」がこもつてゐることを感じた。

「…のぼる。」

のぼるとほぼ同じトーンで夢の島の仙人がつぶやく。美術館の中でそこだけが違う次元に切り離されてどんどん遠ざかつていく様な感覚に襲われた。

「こつ、のぼると同じ「におこ」がする。

夢の島の仙人もとい、はくさんはのぼるを見ていた。のぼるも夢の島の仙人もとい、はくさんを見ていた。

一人の距離およそ10メートル。

「もつと近づけよ」と俺が突つ込む余地のないほどに一人の間には一人の時間が流れてた。

ここで俺がどんな声をかけてもきっと一人には届かないのだろうとその瞬間思い知らされるようだつた。

「くそつ、イライラする…」

どれくらいの時間が流れただろう。

それは5分ほどの様であり、5年ほどの様でもあつたが、腕時計を見るとそれはほんの2分30秒ほどの時間だつた。

「…はくさん、もう大丈夫なんだね。」

「…ああ、ありがとう、のぼる。」

夢の島の仙人は夢の島へ帰つていつた。もとい、はくさんは長野へ帰つていたのだろう。

はくさんは振り返るとゆつくり、ゆつくりと脚を前へ動かし始めた。よく見ると裸足だった。

のぼるはそんなはくさんの後ろ姿をただ見つめているだけだった。

「…からが長かつた。

はくさんはゆつくり、ゆつくり、まるで龜の歩みのじとくゆつくりと出口へ向かつて歩いていく。

それを見送るのぼる。

ゆつくり、ゆつくり出口のドアを空けるはくさん。

それを見送るのぼる。

それは2時間49分におよぶ長い、長い見送りだった。

その間に俺は展覧会を2周ほどして、スタバでカモミールティー490円を飲んでまつたりしたり、トイレへいつたりしていた。

俺が戻つた頃にやつとはくさんは出口のドアに手をかけた所だったので、それから約5分ほど二人の世界を外の世界からのぞき込んでいた。

はくさんが出でいくと、のぼるは涙を一粒落とした。  
のぼるが泣くのを見るのは3回目だった。

「帰りは外で食べていこづか」

美術館を出るともうあたりは暗くなっていた。これから帰つて食事を作るのも面倒だったので、俺はのぼるへそんな提案をしたのだが、

「…ユキのご飯が食べたい。」

「これからだと遅くなつちやうだらう？」

「…待つ。」

「…素直でよひしー」

青いカラフル 第3回

のぼるの創作活動

美術館へ行つた次の日。  
のぼるは早速自分のインスピレーションが感化されたのか、何やら描き始めた。

「お昼はいらないないな」

「…うん。」

「夕飯は食えよ」

「…うん。」

今日は仕事がはかどりそうだな。

いつもはのぼるの相手をしながら仕事を片づけるので時間がかかる  
つてしまふが、まあ、それも楽しみの一つではあるのだけれど、  
それはのぼるには内緒なのだ。

自分の部屋で仕事を片づけていくと、のぼるの作品を作るかすかな音が聞こえてくる。かすかに絵の具の匂いもある。

ああ、心地よいな。

はぐさんに会つた。  
はぐさんは悲しい気持ちだった。  
愛していた犬が死んでしまったから。

はくさんが悲しい気持ちだつたから。  
自分も悲しい気持ちになつた。

悲しい気持ちを半分に出来たから。  
はくさんは少し元気になつた。  
愛していた犬は帰つてこないけれど。  
また絵を描ける気持ちになれた。  
忘れないうちにペロの絵を描くよと。  
はくさんは言つてゐたのだと思つ。

のぼるはその日のうちに青空を描いた。

「今度はうれしい青だな」  
「…うれしいけど、ちょっと寂しい。」  
「寂しいけど、温かい青だな」  
「…うん、青い。」

「青いカラフル」

はくさんに会つた。  
はくさんは悲しい気持ちだつた。  
愛していた犬が死んでしまつたから。  
はくさんが悲しい気持ちだつたから。  
自分も悲しい気持ちになつた。

悲しい気持ちを半分に出来たから。

はくさんは少し元気になつた。  
愛していた犬は帰つてこないけれど。  
また絵を描ける気持ちになれた。  
忘れないうちにペロの絵を描くよと。  
はくさんは言つていたのだと思つ。

「雨の日」

「…朝だ。」

「うん…」

「…起きれるか。」

「うん…」

ほんやりとした意識の中、外で雨が降っている音に気がついた。  
そうか、のぼるはそれで「…起きよ。」ではなく「…起きれる  
か。」と疑問系だったのか。

「大丈夫、今日はそこまで落ちてない」

「…よかつた。」

俺は雨が嫌いだ。いや、苦手と言つた方がいいのかな?  
人間はずつと自然を意のままにしようと様々な物を発明して自然  
の摂理に逆らってきた。

なのに、未だに雨が降ると人々は為すすべもなく傘を差して、服  
の裾がぬれるのを気にしながら歩かなくてはならない。  
未だに人間は自然に翻弄されっぱなしだ。

どうすることも出来ない。

そして、どうすることも出来ないという事が当たり前過ぎて、人々はそれに気付かない。

そのくせ人間は万能だと思つていやがる…

何も出来ないくせに…

俺も…

「…ユキ。」

いきなり名前を呼ばれて驚いた。

いつもの表情でのぼるは俺の顔をのぞき込んでいる。

「大丈夫だつて、今朝飯作るから」

「…無理しない方がいい。」

「無理なんかしてねえつて」

俺は雨が嫌いだ。いや、好きになれないと言つた方がいいかな?  
それでも以前に比べればよくなつた方だ。

ひどいときはベッドから出られず、大事な仕事がおじさんになつた事が何度もあつたほどだ。

それぐらい俺は雨に翻弄されてきた。

「朝飯できたぞ」

「…うん。」

のぼるはベランダに出て「雨を見ていた」。

「…今日はじつとしてた方がいい。」

「俺に言つてるの?」

「…雨が言つてる。」

「俺に?」

「…うん。」

のぼるは「雨を見る」。

すると雨が教えてくれるのだそうだ。

「…ユキ、大丈夫じゃない。」

「いや、大丈夫だつて。朝飯もちゃんと作つたぞ。」

「…」

「朝だつてちゃんと起きたし、今洗濯もしたし…つてゆづか今日は午後からクライアントとの打ち合わせがあるんだ。どっちにしろ出かけなきゃ…」

「行かない方がいい。」

のぼるが人の話を遮るとは珍しい。

そんなに俺はヤヴァアい状態なのか？

「でも、今日まじうしても行かなきゃいけないんだ。仕事だからな。」

「…そ、う、な、か。」

のぼるがうつむく。

そして、天を仰ぐ。

背の高いのぼるが上を向くと、なんだか雲の上まで見わたせそうな気がした。

「…しばりく雨を見よつ。」

「朝飯はいいのか？」

「…ユキのため。」

「俺は腹へつてゐんだけじなあ……」

俺は雨が嫌いだ。でも、今は少し好きかもしない。

俺が雨の日に心のバランスを崩すのは、他ならぬのぼるの性だ。のぼるに出来つまでは「雨」にこじて思い入れなどなかった。なのに……

「…聞こえるか。」

「何が？」

「…雨の声。」

「俺には聞こえないって

「…よく聞いて。」

「聞いてるんだけどねえ……」

「…雨が教えてくれる。」

「雨はしとしと。降り止まない。」

景色がぼんやりとして、頭の中がぼんやりとして、雨の音が聞こえる。

俺は雨が嫌いだ。本当に大嫌いだ。

のぼるはいつもわけのわからない事を言う。  
でも、きっとわからない俺にアイツは必死で何かを教えようとし  
ているのだろう。

でも、それがわからないから。  
教えて欲しいのに…

「…今日はやつぱり、」

「いや、そろそろ行かないと」

「…でも、」

「大丈夫、今聞こえたよ」

「…」

「駅までついてくれないか？」

「素直にならないとな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1122h/>

---

青いカラフル

2010年12月10日22時16分発行